

### コハクを主とするハクチョウ類のグループの 北海道における渡りのルート

木下 茂 鈴木敏郎 玉田 誠  
山内 昇 松井 繁

#### はじめに

私どもは、コハクを主とするハクチョウのグループの北海道における渡りのルートについて、野鳥の昨年5月号に発表した。その後、昨年の5月から9月にかけて、鈴木敏郎（北海道支部会員）山内昇・松井が現地での聞きこみ調査、葉書、電話による問い合わせなどを行い、野鳥に発表の際は不十分であったウトナイ湖における観察を木下茂が、特にコハクの視認に重点をおいて行い、いわゆる北海道の中軸地帯における渡りのルートをほぼ確認したので報告する次第である。

#### 従来のハクチョウ類の渡りの経路 (北海道経由の) についての説

ハクチョウの渡りの経路については、シベリアからサハリン・北海道・本州と、カムチャッカ半島・千島・北海道・本州の2通りのルートがある。というのが現在一般に認められているようである。

八田北大教授（大12）は秋には白鳥が野付地方から、厚岸・釧路地方を経て、ウトナイ湖に渡来するが、春にはウトナイ湖・長部（オサツ）沼馬追（マオイ）沼一現在は共に干拓されていないから釧路・厚岸地方を迂迴せずに頓別地方（クッチャロ湖を含む）に行き、ここから樺太へ渡って行く。更に頓別地方は春に只一回来遊する旨を発表しておられる。

犬飼北大教授（昭17・現名誉教授）は白鳥は秋にサハリンから北海道の野付湾に直接渡来し、ここから各地に移行する。北海道に渡来する白鳥の殆んどはオオハクできわめて稀にコハクがその群に混入しているに過ぎない。またコハクはサハリンのアニワ湾に多く見られるが、このコハクは冬季どこへ飛び去るのか疑問である旨を述べておられる。

会員の阿部学氏（昭38）は冬季間を通じ、たとえ一時期でも、多数のコハクが観察されないのは、あるいはオオハクと渡りのコースを異にするのではないかと示唆された。

#### 北海道における コハクの大グループの発見

昭和45年10月24日、会員の堀内盛一氏が道北のクッチャロ湖で506羽の白鳥をカウントしたが、手前の6割はすべてコハクで、遠方の4割も体型姿勢からコハクと推定された。コハクは北海道に多数渡来していたのである。しかし、この事は当時氏の勤務していた林野庁関係の新聞に掲載されたにすぎず、貴重な事実が埋もれていたのである。

#### 玉田・山内の観察

昭和48年11月2日、7:20AM～3:52PMに約3,000羽のオオハクが霧瀧湖に渡来したのを

玉田が観察した。ちょうどこの朝、山内と松井がクッチャロ湖で白鳥の観察をしていたが白鳥は移動しなかった。そしてその大半がコハクであった。昭和49年の春、秋の藻沸湖における玉田の観察クッチャロ湖における山内の観察結果の一部を、次に挙げてみる。

4月10日、藻沸湖は2,297羽、クッチャロ湖は2,000羽。

4月15日、藻沸湖は2,683羽、クッチャロ湖は2,200羽。

11月6日、藻沸湖は1,127羽、クッチャロ湖は2,400羽。何れも、藻沸湖は全部オオハクでクッチャロ湖は約80%がコハクであった。

#### 渡川のルート of 解明のいとぐち

以上の観察から、クッチャロ湖の白鳥が藻沸湖に渡って行くのではない事が判明したわけであるが、それではこのコハクを主としたグループはどこへ渡って行くのであろうか。解明のいとぐちとなったのは山内の観察であった。すなわち、昭和48年11月に、クッチャロ湖西方の仁達内（ニタチナイ）の山中で、また49年には、同じく石炭別の沢で、コハクがそれぞれ南西、南々西の方向に、更に別の機会にクッチャロ湖畔（大沼）から、数百の白鳥が南西の方向に渡って行くのを再三にわたって観察した。

これとは別に松井は昭和44年以来、新聞雑誌などに、春に旭川・北竜・砂川・北村などで、コハクあるいはオオハクが降下したり、保護された記録があり、これらの白鳥がどこへ渡って行くのか疑問に思い、また秋には目撃の記録がなく、これも不思議と考えていたのであるが、（この時点では八田教授の論文は知らなかった）これがクッチャロ湖を飛び去った白鳥と結びつかないものかと、天塩川の中流、名寄、士別などで調査をした。そして春と秋にわずかであるが、視認の事実がある事が判明した。これに力を得て、北海道新聞、

士別市の道北日報に“白鳥の渡りの目撃者は御一報を”という記事を掲載してもらい、昭和49年12月には士別市の天塩川に50羽のコハクが降りたことを確認し、また和寒（ワッサム）町の福原上空を、11月、12月に白鳥が渡っている事が判明した。

以上の事から私どもは、さきに「野鳥」に報告したのであるが、さらにこれを精確なものにすべく上述の調査を行ったのである。

なお、北海道の中軸地帯というのは、最北端の宗谷岬から襟裳岬に至る宗谷丘陵・北見山地・天塩山地・日高山脈が構成する。北海道の脊梁部で北海道の胴体とも言われる地域のことである。

（図1）（次ページ）

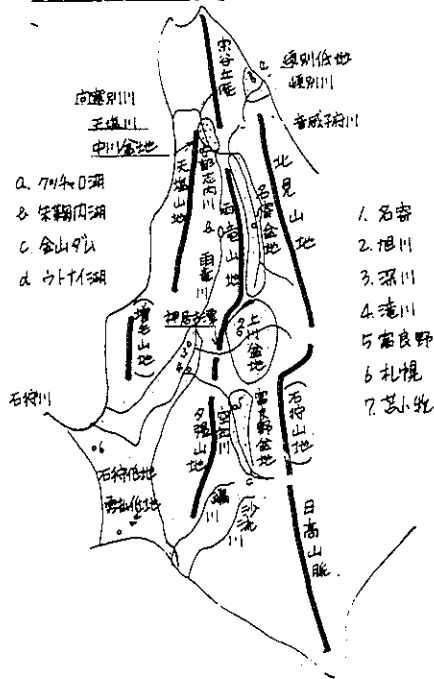
#### 白鳥の中軸地帯における渡りのルート

（図2）（次ページ）

クッチャロ湖の渡りの出発点は2つある。1つは同湖の大沼（クッチャロ湖は小水路をはさみ、北の大沼と南の小沼に分れる）を発ち、頓別川の谷から天塩川の支流の音威子府（オトイネツ）川の谷へ渡り、音威子府で天塩川の谷、名寄盆地へでる。

もう1つは同湖の小沼から石炭別の沢へ飛び、ここから間寒別（トイカンベツ）川の谷へ渡り、佐久（サク）に達し、ここで2つに分かれる。1つは本流の上を渡り音威子府で前者と合流する。音威子府から美深（ビフカ）、名寄（ナヨロ）、士別（シベツ）を通過して、和寒の福原で名寄盆地を離れ旭川の江丹別（エタンベツ）、深川の上湯内を経て、石狩低地帯へ出る。石狩川の河跡湖の樺戸沼、宮島沼、猫沼、長沼を過ぎてウトナイ湖に達する。もう1つは佐久から支流の安部志内川の沢を上り、朱鞠内（シュマリナイ）湖に達し、ここで2つに分れる。1つは石狩川の支流の雨竜川の谷を下り石狩平野に達し前記のルートをとる。残りのグループは、下塩山地の西のブロック

図1 北海道東部の地形図



- a. 7440湖
- b. 宋鞠内湖
- c. 金山ダム
- d. ウトナイ湖

- 1. 名寄
- 2. 旭川
- 3. 深川
- 4. 滝川
- 5. 富良野
- 6. 札幌
- 7. 苫小牧

の雨竜山地（雨竜山陵とも呼ばれる）の南北の谷である温根別（オンネベツ）川を下り、福原に至りここから前記のように石狩平野にでる。

福原及び和寒から上川盆地にでるものもある。このグループは神居古潭を経て石狩平野にでる。

### ウトナイ湖における木下等の観察

ウトナイ湖では湖畔のユースホテルで、給餌保護及び観察を行っているが、1・2月にはコハクは見られない。しかし昨年3月には100羽、4月には107羽のコハクの集団を観察している。秋には白鳥が遠く、その識別は不可能であるが、昨年11月には7羽のコハクのグループを視認している。また本年4月4日の白鳥の総数は550羽でコハク303羽、オオハク80羽で、残りは識別不能であった。

4月5日には、ウトナイ湖東方5kmの弁天沼で苫小牧のS氏、札幌のH氏らが、グリーンのパンドをつけたコハク（記号・番号は確認できなかったが、昨年4月にクッチャロ湖で標識放鳥し、今シーズン酒田で視認された001Yであろう）が観察されている。

### 噴火湾の有珠（ウス）大沼及び

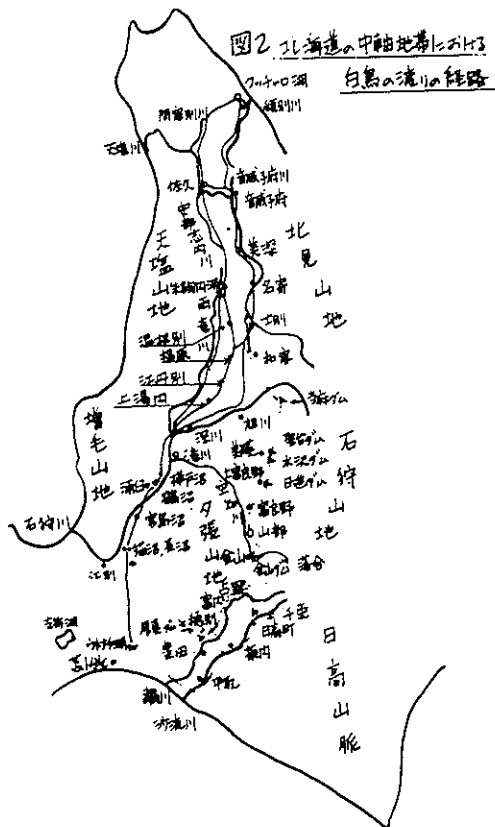
#### 青森県の白鳥

ウトナイ湖以南の北海道における定着渡来地は有珠及び七飯（ナナイイ）町の大沼であるが、ここはオオハクのみで、コハクは認められない。ところで、青森県の大湊・藤崎・十三湖などでは、コハクは非常に少い。しかし、下北半島の付根にあたる尾駮（オブチ）沼、小川原湖ではコハクが多数見られる。従って、コハクを主とするグループはウトナイ湖から尾駮沼、小川原湖に渡って行くと考えられる。

なお以上の渡りのルートは秋についてのみ述べたが、春はこの逆である。

図2 北海道の中部地帯における

白鳥の流りの経路



### 渡りのルートについての小括

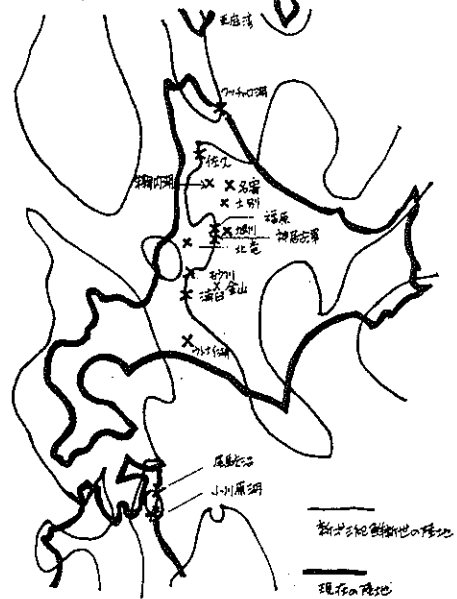
頓別任地・名寄盆地・上川盆地は地理学上は中央低地帯というが、これと、この西の天塩山地の南北の谷である安部志内川・雨竜川の谷、そして天塩山地（漕毛山地も含む）と夕張山地にはさまれた石狩低地帯を通り、ウトナイ湖へ、そして、ここから青森県の尾駱沼、小川原湖へ渡って行くのである。（春はこの逆）

なぜ中央低地帯、及びこれに平行する天塩山地の低地帯を白鳥が渡るのだろうか？

現在飛んでいる鳥類の大部分は、1,200 万年～200 万年前に地球上に現われた。そしてその渡りは洪積世（200～100 万年前）のずっと前から行われたということであり、第3紀鮮新世（600～200 万年前）あたりに白鳥が渡っていたとしてもそう無理ではなく、また水鳥の渡りのルートはかつて存在した海岸線でありこの先租のルートは今でも渡っていると云われているのでこの鮮新世の古地図（"目で見る日本列島のおいたち"より）上に降下あるいは視認点を求めてみると、図3のように佐久・福原・砂川・浦臼などが海岸線上にある。鮮新世の400 万年間、この海岸線がそのままであった訳ではなく、日高山脈の生成過程で海岸線が移動した筈である。日高山脈・神居古潭については次のように言われている。新第3紀中新世の中頃には、東西から日高山脈の麓まで海が侵入し、太古のオオツク海に日高の島が浮かび、その西側に神居古潭の暗礁が白波を噛み、はるか彼方に大陸がかすんでいる風景が見られたわけである。新第3紀の後半から第4紀にかけて、日高山脈は隆起の過程をとる（湊・井尻著"日本列島"）。

すなわち、北海道中央低地帯、これに平行する安部志内川・雨竜川の谷・石狩低地帯などはかつては海であり、海岸であったので、白鳥たちが渡っ

図3 新第三紀鮮新世の古地理 (600万～200万年前) 目で見る日本列島のおいたち、p. 87



ているのである。

### むすび

北海道の中央低地帯及び安部志内川・雨竜川の谷、石狩川平野などで、白鳥の渡りに関して聞きこみ調査を行い、古地図からそのルートを検討してみた。なお、今シーズン最大のニュースと考えられることを付言する。この4月2日にクッチャロ湖で、アメリカコハクチョウ（今シーズンは小川原湖で確認されたのみであるが、両者の嘴の黄斑部の写真を比較してみると、非常によく似ており、同一個体であろうと考える）を、翌3日には今シーズン当初に、伊豆沼で視認された、赤い標識017Cをつけたコハク、更に4月14日には昨年同月同日にクッチャロ湖で標識放鳥した001Y（今シーズンは酒田に渡来していた、コハク）を山内が確認した。私どもは沙流川・鶴川の谷におけるルート、更に道東地方におけるルートも調査しており、いずれ発表する予定である。御指導御高評をお願いする次第である。

最後に私どもの調査に御協力下さった皆さんに心から感謝するものである。